

---

# 笑い日和。

大野さいころ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

笑い日和。

### 【NZコード】

N1856BA

### 【作者名】

大野さいじろ

### 【あらすじ】

剣も魔法もバトルもないが、幼馴染あり馴妹ありハーレムありの学園コメディ。力を抜いて読んでいただきたいです。たまにショートストーリーも投稿します。

投稿は不定期です。

## #1 こつもの風景（前書き）

はじめまして。大野さーーと申します。  
到着地点を見つけないまま出発してしまったので道に迷つかも知れ  
ませんが、  
どうか温かい目で見守っていただければ嬉しく思います。

## #1 いつもの風景。

気がつくと見たこともない場所にいた。

……なんてことはまったくなかつた。

ここは2・B、つまり俺 大藤功<sup>こう</sup>がつい先日、四月の頭からいるクラス。

そういえば授業中だつたつけ？

まあ少しうとうとしてしまうのはおそらく学生なら誰しも経験があることだし、特に気にしないで教科書とノートの確認をしようとしたところであることに気がついた。

静かすぎるのだ。

いや、授業風景としてはこれ以上ないくらい正しい状況だけど。このクラスに限つては静かすぎるることは異常なのだ。

普段はあまり真面目な生徒がいないのか「onsoonso」話したり「onsoonso」何かしている音がするのがこのクラス。

授業なんて真面目に受けるのは真面目な委員長とその他少数だ。周りにクラスメイトがいるから寝てる間に教室移動があつたわけでも、皆が急に真面目になつたわけでももちろんないだろ？  
俺が一人疑問に思つていると、後ろから背中をシャーペンで小突かれた。

伊藤恵<sup>めぐみ</sup>。 クラスマイトであり、俺の親友でもある女子。  
恵とは去年知り合い、どうしてだつたかわからないが意氣投合して

仲良くなり現在にいたる。

現在席は俺の後ろで、授業中もよく今みたいに背中を小突かれるの  
でいつもなら特に驚いたり声を上げたりはしない。

そう、こつむなりである。

「痛いわー！」

授業中とこいつことを忘れて反射的に振り向きながら恵に怒鳴った。  
いつもなら恵はしまって小突いてくるのに今日は思いつきつ出来る  
ようだ。

背中にチクつとした痛みがまだ残ってる。しかもなんか一か所じゃ  
なく全般的にチクチクしてるんだけど…  
とこいつか、背中に刺さつたつてことか…

「ワイヤーシャツ貫通してるじゃねーか！－恵、なんで今日は恵に

しまつてないんだよ、と俺が続けようとしたら恵に

「（前ー前ー）」

ヒジHスチャー付きロボボクで伝えてきた。

なんだろう？？と思いつ、その仕草が馬鹿みたいだなーと場違いなこと  
を考えながら前を向くと

「モンスターがいた」

モンスターがいた。なぜか青筋をたててゐるし。  
後ろで恵が「思ったこと口に出しからつてゐるし……」とか言つてゐるが  
何の事だかわからぬ。

このモンスターは分類では人間で、国語教師の通称『体育』。  
文系の教師のくせに筋骨隆々で見た目は完全に体育会系。  
ちなみに中身も体育会系。

怒らせるとかなり怖いと評判の先生だ。  
ちなみに顔も怖い。

ここまで考えて めちゃくちゃ失礼なことを やつと理解した。  
このクラスが異様に静かで、恵が俺に何を伝えたかったのかを。  
そこまでわかつて嫌な汗がだらだら出てきた……。

そしてモンスターが動きを見せようとした時、

「殺さないで下さこ……」

おもいっきり叫んだ。命がかかっているんだ。恥がどこのいつの言  
つてられない。

しかし後ろのほうで笑つてゐやつはひやんとあとで制裁しよつ。俺が生きていればだが…

「誰が殺すか！お前は俺をなんだと想つてゐるんだ！」

「えつと…。やせじい国語教師だと想つてゐます、

「セツモンスターつて書つておいて、よくそんなことが聞かれるなー。」

「心を読まれていた！？」

「口に出して言つてたわ！…まあいい。何か言い訳とかはあるか？一応あるなら聞いてやるわ。」「

「なぜ体育の教師にならなかつたんですか？」

「余計な御世話だ！廊下に立つてる…。」

笑い声が聞こえる中、すうすうと廊下に出ていく俺。

廊下に立つてゐだけにどんな意味があるのかを誰かに聞きたかつたが、そんな仲間は授業中の廊下には誰もいなかつた。

ただ立つてゐるだけの、暇な間少し考える。

俺が通つてゐるこの学園は『私立国際学園高等部』。

国際とつくだけあって、一年生のクラスには毎年五月の中頃から留学生が来る。

どのクラスに来るのかはわからないが、面白いやつだとうれしい。ちなみにクラスは2・B。A～Eまでクラスがあり、一クラス40人程度の普通規模の学園だ。

また、すぐ近くに『私立国際学園中等部』があり、俺は一昨年までそこに通っていた。

ちなみに中学には現在俺の妹が通っている。

きっと再来年には妹もこの高校に上がってくるだろ？

高等部には受験なしで来れるありがたいシステムがあつたので、中学からの顔見知りもかなり多い。

もちろん外部から受験してくる生徒もいる。そういう生徒はやはり、留学制度などに興味があるのだろうか。

ちなみに俺は留学なんぞに興味はない。ここに来たのも受験なしという甘美な響きに誘われたからだ。

しかしそんな俺でも今ではこの学園をかなり気に入ってる。

というのも、不良がいないからだ。

不真面目な生徒はいるが、不良はいない。

ちなみに今住んでるこの町自体治安がかなり良い。

そんな環境を俺はかなり気に入っている。

荒波立てず、平穏でそれなりに楽しい生活ができる今を大切にしたいと思つている。

これからも仲の良い友達と、楽しい時間を過ごしたい。

キーンコーンカーンコーン…

チャイムが学校中に鳴り響く。

授業が終わり、廊下にもいろいろなクラスの活動音が聞こえてくる。俺はさつそくいつものメンバーに混ざるために、教室に入ろうとしたが

またもやモンスターに出くわした。

よく考えれば当然だ。

モンスターに追い出され、教卓側のドアから入るうとすればモンス

ターに会つのは必然だつた。

しかし、さつきまで悦に入つて自分の考えに浸つていたのですつかり忘れていたのだ。

「大藤、これから一緒に昼休みを過ぐやうか。反省文ならおひつてやるから」

「ありがとうございます。けど遠慮し」

「遠慮なんかするな。」

「いえ、遠慮」

「するな」

「は……」

強制だつた。笑顔が不気味すぎて怖かつた。

こうして俺は昼休みを失つてまでモンスターと過ぐすことになつてしまつた。

教室からニヤニヤと見てくる悪友らを恨めしく思いながら、反省文を食べに行くのだった。

## 「肉じゃが」（前書き）

本編とはまったく関係ないです。

あらすじにショートストーリーもあり、と書きましたがこれがそうです。

以後も今回と同じように、サブタイトルに関連する話をショートストーリーとして

投稿するつもりです。

ちなみになぜ肉じゃがかと言いますと、作者が実際に知人と肉じゃがについて

話していたからです。毎回ショートストーリーのサブタイトルはこんな感じで

決まりますので、深い意味などはないのであしからず。

何度も言いますが、本編とはまったく関係ありません。

「肉じゃが」

功「恵よ。肉じゃがの『じやが』って何か知っているか?」

恵「じゃがいもの」とでしょ?」

功「そうだ」

恵「なんかす」「こ偉い!」しゃべるね?」

功「意味はまったくないがな」

恵「じゃあやめよう?」

功「あれ、恵には不評だったか?」

恵「うん、なんかイリッとした」

功「そ、わつか…。笑顔がなんか怖いんだが…」

恵「そんなことないよ。っていうか、すでに誰かに試したの?」

功「ああ、美香にな。あいつはす」「喜んでくれたんだけどなー」

恵「あー美香ちゃんにか。なるほどねー」

功「なにがなるほどなんだ?」

恵「美香ちゃんだから、功くんのやる」となす」となんで

も嬉しいんだよ」

功「やさがにそれはないと思つたびだな。さびよくなつたから喜ばれつてのも確かにおかしいな」

恵「でしょ？まあそれはいとしつれー」

功「うん？」

恵「結局なんだつたのかなーと思つて」

功「？？」

恵「そんな本氣でわからなつて顔されても困るんだが」

功「ああーなんであんな偉そうにしてついたのかつて」とか？」

恵「違つよー肉じゃがの話ー。」

功「ああ…そんな話もあつたな」

恵「なんでそんな昔の」とのよひ…」

功「いやーわづきの恵の顔が般若みたい」

恵「二二二」

功「なんでこことさなくただ俺がどまれつただけでした？」あんなさい！」

恵「もう。で、肉じゃがの話は結局なんだつたの？」

功「あーうん。今日食べたいなあと思つただけなんだけど」

恵「それだけ！？」

功「恵よ。肉じゃがが食べたいぞ」

恵「もうここよそのキャラは…」

功「ふふふ。ふははははははは…」

恵「二八」

功「クレープはいかがですか、姫様」

恵「態度変わりすぎだよーそんな怯えなくとも…」

功「冗談だよ。すいません、イチゴクリーム味のクレープ一つください」

恵「いいのー？」

功「今日だけな」

恵「ありがとー。」

店員A「やつとこきましたね…」

店員B「ええ。クレープ屋の前で肉じゃがの話を始めた時はびっくりしたわ…」

店員A「しまじにはコントみたいこと始めちゃったしね…」

店員B「けどいつも仲よさやつなカップルだったわね…」

店員A「羨ましいわ…」

店員B「ホントにね…」

店員A&B「はあ…」

Jの曰、功と恵の何気ないやり取りで一人のクレープ屋店員が憂鬱にさせられたのだった。

## 「肉じゃが」（後書き）

結局肉じゃが関係なかつたとこいつオチでした。  
もはやサブタイトルの意味がない気もしますが、あまり気にしない  
でください。

## 「サンタクロース」（前書き）

本編がまだ進んでないのでキャラが一人しか使えないという不便極まりない状況です。

## 「サンタクロース」

功「サンタって無駄な労力を使ってると思わないか?」

恵「唐突に話しあしたねー」

功「まあ付き合つてくれよ」

恵「いいよー。で、一体サンタのどのくんが無駄だと思つの?」

功「まず服装かな。煙突よじ登つたりするにはあのものじゃなかった服はよくないだろ」

恵「うーん確かに。けど動きやすい服装にした場合、煙突よじ登つたりしてるとこ見られたらそれはただの変質者に見えないかな?」

功「そうだな。けどその問題は簡単に解決できる」

恵「そななの?結構難しい問題に思えるけど」

功「サンタって子供に欲しいものを的確に『えるだろ?』つまり、それぞれの住所を特定できるすべを持つてることになる。だから郵送すればいいんだよ!そしたら誰にも姿は見られない!」

恵「なんでそんなに興奮してるの?」

功「むしろ現金書留でいいよ!現金なら自由度が高いし、万が一欲しいものが直前に代わっても対応できる!」

恵「それは夢がなさすぎるよーー。」

功「しかもあいづはトナカイがいなければただのオッサンだしな！飛んでいるのはトナカイであつてあいづはそりに座つてるだけだから！感謝するよトナカイにー！」

恵「だからどうしたのー？サンタに恨みでもあるのー？」

功「しかしなるほど。ここまで考えてわかつたけどあえて動きづらい服装をし、現金ではなく物を送り、トナカイを操り移動するのはすべて演出だったのか。まったく、サンタも中々粋なオヤジだな！」

恵「もうつこていけないよー！」

## #2 こつもの風景 2 (前書き)

閲覧じゅうもありがとうございます。

何話か書きためてはいるんですが、中々作品の中の一話が終わらなくて困っています。予定ではこの回で一日が終わるはずだったんですけど…。

楽しんでいただければ嬉しいです。

反省文も無事終わり、午後の授業も終わった放課後。何をするでもなく、帰るわけでもなく、何となく集まっている3人の影。

一人は俺、大藤功だ。

一人はこの中唯一の女子で親友の、伊藤恵。後ろの席で二コ二コして椅子を傾けて遊んでいる。

どうでもいいけどかなりあぶなっかしい。そして楽しいのかそれ？そして最後の一人、黒川悟は馬鹿代表だ。

「黒川悟は馬鹿」

「急に罵倒すんのやめてくれよーーー？」

「黒川悟はオタク」

「否定はしないけど改めて言わるとムカつくーーー！」

「黒川悟はブサイク」

「女子に言わるとマジで傷つくよーーーか伊藤も功に乗るなよーーー！」

「黒川悟は」

「もついいでしょーーー？ そんなに俺の心を傷つけて楽しいーーー？」

「「全然？」」「

「じゃあやめてよーなんで無駄にそんなことあんだよー?」

「『騒だから』」

「僕たちホントに友達なのかな…?」

「「…」」

「黙らないでよー…まつたく、功と伊藤がそろつと手に負えないよ。前だつて…」

悟は愚痴をこぼすよ。そもそも何か言い始めた。  
こんなときの悟は中々戻つてこない。さすがにやりすぎたかな?  
どうにも恵とこのと悪ノリしてしまつ傾向があるなーと皿分析していふと、

「皿はお疲れさまだつたねえ~」

と恵に『氣の抜けるよつた声』で話しかけられた。

「まつたくだ。それにしてもちつとも助けてくれなかつたな?」

少し責めるよつた眼をして言つてみる。

「だつて功くんつてば全然起きないんだもん」

全然氣にせず、そしてなぜか若干悲しそうな顔で言つてくる。  
とこつか起ここやつとしてくれてたのか…。悪いことしたなあ。

「そつか。『めんな?お詫びに帰りになんか奢つてやるよ』

「ホントにー? ジャあジャあクレープとアイスとハンバーガーと」  
「どんどん出てくる食べ物の名前。恵は小柄だがよく食べるのだ。  
つーかその小さい体のビニにそんなに入るんだよ、と疑問に思われるを得ない。

「ポテトにジャコースでしょ? あとは」

「太るぞ?」

恵がさらに何か言おうとしたといいで、女子に効果抜群な言葉を浴びせる。

恵はよく食べるが、別に食べても太らないわけではないのだ。

「う、…」

言葉に詰まる恵。そして追い討ちをかける俺。

「だるまみたいになるぞ? セツカくかわいいのに」

「う、…え?」

「え?」

「あ、いや…つていうかだるまつてひどくないー!?」

「あ、ああ。なりたくなかったらどれか一個にしつけて」

恵の何かよくわからない勢いに若干押されつつも、自分の財布のた

めに提案する。

「うへ、わかつたよ。じゃあクレープ」

「りょーかい

「3個ね

「結局ーー?」

3個も食べるのーー?

予定外の出費が…。今月は結構金使う予定あるのに大丈夫かな…。  
まあもう決まっちゃったので切り替えよつー。  
あつとビックでこの分の金が戻ってくると信じてーー!

と、およそ現実的でない期待を抱いてると

「早くこーーよーー」

と急がされる。

食べ物が絡むと恵は子供っぽくなるなーと苦笑してると手を引っ張  
られた。

「功くん、おいていくよー?」

「おいていく気ないじやん!」

めつちや力強いよー?簡単に引きずられてもよー?。

「い・い・か・らー」

「わかつたから引つ張んなつてー。」

自らも足を進めると、まだぼそぼそと向か言ってる悟が田に入った。  
まさかあれからずつと?なんかちょっと怖いし。  
まあおいてく氣もないので声をかける。

「悟、いくぞー。」

「だいたい功は中止から…って、え?どう?」

「だから、クレープ屋」

「こつまにそんな話にー?」

ちつとも聞いてなかつたのかよ。

「さつまの聞いてなかつたのか?悟のおいじりでクレープ食べるつて  
話

「聞いてもなにして承もしてないのに決定してんかよー?」

悟は正当な抗議をしてくるが、とりあえず無視を決め込む。

「行くか」

「無視!?なんか今日冷たくないー?」

「うーん?いつもこんな感じだと思つたけど…  
しかしそくよく考えたらなんか可哀そうになつてきました。」

だつて俺からだけじゃなく、大抵の人は悟には似たような対応をするんだぜ？」

もしかしたらこいつは結構寂しい思いをしてるのかもしれないな…。俺は携帯を一回取り出し、少し操作して時間を確認し机に置いた。

「（めんな。今日からは俺だけは優しく接してやるから。） そุดな、まずは一緒に登校するか？」

「急に何で！？」

唐突に言われた内容に悟は驚嘆していた。 悠もなにがなんだかわからぬよつな顔をしている。

「功くん、なんで悟なんかに優しくするの？」

恵は相当地じごとくを言つてゐるが、今はそんなことなどいでもいい。

「（こつはきつと優しさに飢えてると思つんだ）

「優しさ？」

恵は頭に？マークを浮かべてる。

しかし、俺が一瞬だけ目線を置いた携帯に移すと恵は「ふつ」と笑い、頷いた。

「俺らは悟に対して自然に冷たい態度を取つたりしてることに気づいたんだ。しかしこれからもそれが続くと語が耐えられるかどうかわからないじゃないか」

「え？ いや僕は別に……」

「もういいんだよ、悟」

俺は朗らかに笑いかける。

すると恵も俺に会わせて優しい口調で話しかける。

「そつか、そだね。今までごめんね？ これからはもう一回じつたり  
冷たい態度とか取らないからね？」

「俺もだ。今まで氣づけなく『ごめんな』？ 他のみんなも同じで  
おつかれ！」

俺と恵は今きつと爽やかな笑顔を悟に向かっているだろう。

拒む悟を恵と二人で置み掛ける。

「お前が心配なんだ、悟」

「もうだよ。今日からもう何も心配しないでね」

「だから……」

悟が大声で何か言おうとしている。

やつとか、と思い恵を見ると、すでにちよつと笑っていた。

「僕は優しくされたいわけじゃないから……むしろ功からは優し  
くされるより冷たくされる方が嬉しいよ……」

悟の思いは教室中に響いた。

「さうと今ここは自分が言つたことをちゃんと理解していないう。」

俺は携帯を手に取り、操作しながら話して言つた。

「わかったのか…。全然気が付けなくてごめんな?」

「わかつてくれればそれで」

いいんだ、とおそれいく悟がそう続けようとしたりで、ピッヒーう無機質な機械音が聞こえた。

俺の携帯から。

そして数秒後に先ほどの再現がなされた。

『むしろ功からは優しくされるより冷たくされる方が嬉しいよ…』

恐ろしそういの静寂が教室を覆つた。

……。

「知らなかつたよ。お前、ホントに だつたんだな」

「今まで功くんに苛められて喜んでたんだね? つわあ……」

軽蔑の視線をダブルで浴びせる。

「違うー今は違うからー。」

「…………」

「…………」

「そんな田で見ないでくれー。」

「興奮するのか?」

「しないよーって伊藤も本気で引かないでよー。」

「だつてえ……。MでB」って……」

「勝手にJB」追加しないでよー。」

「恵、いじめても喜ばすだかだぞ」

「わーここよー帰るー今口は帰るからー。」

やつ言つてホントに帰るつとする悟。  
さすがにちよつとやつすぎたかな?

「悟ーちよつと待てー。」

「……」

語は無言で振り返る。

やはりやつすぎたのか、若干涙が浮かんでいる。

俺はそんな語はして言った。

「悪い。帰るならクレープ代だけ置いてってくれないか？」

たつぱり三秒後。

「むづやだああああああ！」

悟は猛ダッシュで帰つて行つた。

「さて、クレープ食いにいくかー」

「功くん、鬼だねえ」

そんな悟の弦を背に受けつつ、教室を出るのだった。

## 「トイヘン」（前書き）

閲覧ありがとうございます。

ショーストーリーは何も考えずに書けるので投稿頻度は高くなっています。

ただ内容はびつでもこことしか書いてないです。

「トマト」

悟「どうしてたの？」

功「ちよつとな

悟「トイレでしょ」

功「なんで知ってる？ストーカーか？」

悟「なんで真っ先にその疑いを持つかな！？」

功「いやだつて、なあ？」

悟「その「しようがないじやん？」みたいな顔やめろー。シヤツが  
出てたからわかっただけだよ！」

功「あーホントだ。気付かなかつたわ」

悟「しまわないと怒られるよ

功「そうだな。ところでなんでうちの学園つてウォシュレットがあ  
るといふことないといふがあるんだ？」

悟「確かに一階のトイレにはほとんどないね

功「職員室前のトイレはあるよな。あれは羨ましい」

悟「僕はウォシュレット使わないから別にいいかな」

功「なんで使わないんだよー!？」

悟「なんで怒ってるかわからないけど、あれってくすぐったいから好きじゃないんだよね」

功「いやむしろ気持ちいこだろ」

悟「いやいやお尻に水を直接かけられて気持ちいとか考えられないよ」

功「そりゃって改めて言わると変態っぽいけどな、あれはやっぱり気持ちいこよ」

悟「見解の相違があるみたいだね?」

功「俺は譲れない。お尻がきれいになつて気持ちいこなんて一石二鳥だろ!」

悟「あれは気持ち良くないねーへすぐつたくて我慢できなこよー」

恵「…」

功「恵!いいじにいたーちょっと聞きたい」とが

恵「男の子一人で…お、お尻が気持ちいとか我慢できないとか…やつぱつわつこいつ関係なの?」

悟「ちちがいよー」

功「どもるなー信憑性が薄まるだろーあと恵やつぱつてなんだよ  
!?  
」

「トマト」（後書き）

自分でも何書こうんだろ? うと想っています。

「**御用語**」（**禮儀用語**）

閲覧ありがとうございます。

功「すい」と話してもいいか?」

恵「いいよー」

悟「いいけど、なんか漠然としてるね?」

功「聞けばわかる」

悟「なーい。けど。で、どんな話なの?」

功「ああ。これは前に元に電話がかかってきたときの「ひとなんだ  
が」

以下回想（電話相手はA表記）

功「もしもし大藤ですけど」

A「いらっしゃい〇〇会社のAと申します。お父様かお母様はいらっしゃ  
いますでしょうか?」

功「すみません。どちらもいないので自分が用件を伝えておきま  
しょうか?」

A「ありがとうございます。それではメモなどを用意していただい  
てもいいでしょうか?」

功「わかりました。ちょっと待つてください。」

A「はい」

功「メモは～つと。あつあつた。もしもし？」

A「……」

功「あれ？もしもし？ん？電話越しに何か聞こえるな」

A「……だから私じゃないんですつてーそれと今電話中なんですよ  
つと待つてくださいー」

？「……お前以外に誰がいるんだ！だいたい上司との話途中に電話  
なんかしてるなー！」

A「……お客様への電話なんですから待つてくださいー」

？「……ちょっと電話かせー！」

A「……つあちゅうどーー」

？「申し訳ありません。今忙しいので電話切らせていただきますーー」

功「え？あの…今そちらから電話かかってきたんですが用件だけで  
もー

ガチャッ。ツーッーツーッー…

美香「あれ？おにーちゃん子機握つて何してんのー？」

功「いや、何もできなかつたんだよ…」

美香「へ？」

功「気にするな。それより何か用か？」

美香「うんー。今日もお兄ちゃんとお風呂入りつて思つて…」

功「いつも一緒に入つてゐみたいに言つても駄目だからな…」

美香「ちえー。じゃあ早くキスして？」

功「どうこう」とー？じゃあの意味が全くわからない…」

美香「兄は妹にキスしなきゃいけないんだよー？」

功「そんな決まりは絶対ない！全く、『冗談もほじほじ』しろよ？」

美香「はーい。まあ、私たちいつも寝てゐる間にキスしてゐるもんね？」

功「それは夢でつてことか？それとも俺が寝てゐる間にキスしてゐるもんか…？つてか冗談だよなー…？」

美香「キスしてくれたら教えるー！」

功「本末転倒じゃねえか！」

以上回想終了

功「つてことがあってな」

恵「たしかにすうじねー」

悟「うん。そんなことがあつたんだ…」

功「さすがにびっくりしたよ」

恵「私もー。まさかねえー」

悟「ああ、まさかなあ…」

恵&悟「功（くん）がそんなにシスコンだつたなんて…」

功「そつちー？電話の話がメインなんだけどーしかもシスコンじゃないしー。」

恵「いやあ電話の話も驚くけどさ、仲良いのは知つてたけど兄妹ですごいことしてるんだなーと思つてさー」

悟「インパクトが強すぎて電話の話が大したことじゃなく思えるな」

功「そんなにか？美香がいつもあんな感じってことは知つてるだろ？」

恵「キスまで進んでるってことは知らなかつたなー」

功「それは美香の冗談だつて！…………多分」

悟「うちの妹じや 天地がひっくりかえつてもあり得ないよ。ただで  
さえ会話があんまりないのに」

功「それはお前が奈央ちゃんに嫌われているだけだ！」

悟「うひ。 やんな直接言わなくても…」

惠「黒川が奈央ちゃんに嫌われてるのは周知の事実でしょー？」

悟「ひどこや…」

惠「功くんもシステムのはわかるけどもつ少し節度を持つて生活  
しなきや！」

功「違ひつてんだろー。ひつ考えてもおかしいのは美香だらつー。  
？」

惠「けど時々断りきれなくて一緒に寝てるんでしょー？」

功「それは…つてなんで知つてんだよー？」

惠「美香ちゃんが言つてたよー」

功「あいつが俺のシステム疑惑の原因か！」

悟「疑惑じゃなくて事実でしょー」

惠「妹に好かれてる分他人から嫌われてよー」

功「妬むなー嫌に決まつてんだろー！」

恵「結論ー功はパソコン、黒川は妹に嫌われている兄略して嫌兄ー！」

功&悟「勝手にしめるなーー！」

## 「電話」（後書き）

電話の話は作者の体験談だつたりします。

### #3 いつもの風景 3 (前書き)

閲覧ありがとうございます。  
全然進まないです。

「こつものとくわでいいか？」

「いいよー。あそこ」のクレープおいしいからー。」

悟が走り去った後、恵と一人でクレープ屋に向かつていた。学園から少し歩いたところにある公園に女性に人気のクレープ屋があり、そこに向かつている途中だ。

声のほうに顔を向けると、結構遠くに中等部の制服を着た女の子三人組がいた。

そのうちの一人が凄い大きな声で叫びながらこっちに走ってきていた。

残りも一人も続いて走ってきた。

「ちょ、待つてよ美香！ほら、奈央も行くよ！」

「美香ちゃんも香奈ちゃんも走るの早いよ」

別に走つてこなくていいのになあと恵に苦笑すると、

仕方ないよーと同じく苦笑している。

仕方ないってなんでだ？

恵に聞いてもはぐらかされ結局わからずじまいだつたので釈然としないが、考えてもわからなかつた。

それにしてもこの二人組はいつも一緒にいるんだな。

仲良しで微笑ましいと思っていると、先頭を突っ走っていた我が妹美香が勢いを殺さずに突進してきている。

「お、おい美香ー。そろそろ速度落とせつてー。」

「頭大丈夫か！？」

わけのわからないことを叫びながらも、いまだ止まらない妹。  
そして目の前まで来たかと思つと

「妹ダーアイブ！」

言葉通りにダイブしてきた！？

「なんの！兄キャラーツチ！」

避けると怪我をするかもしないと思い、キャッチを選択した。しかし、つられて俺もまでテンションがおかしなことになっている。

「さあ、いいー絶対受け止めグフツー……やる……ぞ……」

「お兄ちゃんありがとーーさすがお兄ちゃんだね！」

俺に抱きついて『満悦な美香。

妹に抱きつかれてぐつたりしている俺。

実に対照的である。

「功くん！？大丈夫！？」

「やつと追い付いた！もつ美香急にって功先輩！？」

「功さん！？大丈夫ですか！？」

「つふふ…。ふふふふふふ…」

「こわつ！功くんめちゃくちゃ怖いよ…」

恵が何か恐ろしいものでも見たかのよつた反応をする。うふふ。一体何に怯えているのかしら？

思考がなぜかオネエになりかけていたが、泣きそうなほど、というか既に半泣きになっている奈央ちゃんが目に入り一気に覚醒した。

「はつ…！瞬意識がとんでた気がする…。そして腹がめちゃくちゃ痛いんだが…」

「功先輩大丈夫！？さつき急に不気味な笑いを漏らしてたけど」

「ああ、よく覚えてないけど腹以外大丈夫みたいだな。心配してくれてありがとう香奈ちゃん」

「そりや心配もしますよ。ホントにぐつたりしてたし。…それに功

先輩のことだし

「え？」

「なななんでもない！」

急に慌てる香奈ちゃんだが、俺にはさつぱり理由がわからなかつた。そして先ほど半泣きしそうになつていて、そしていま今は泣いている奈央ちゃんに顔を向ける。

「奈央ちゃん、泣かないで」

「だつて、ひくつ、功さんが…」

「奈央ちゃんは優しいなあ」

「まだに抱きつこうる美香を引つペがし、奈央ちゃんを抱きよせゐ。騒ぐ妹は無視する。

ちなみにこんな大胆とも思える「」とをするのは奈央ちゃんは美香ともよく一緒にいるせいか妹の様に思えてならないからである。

「ひく…」

「ありがと。けど、奈央ちゃんが泣いてると俺も悲しいよ」

「功さん…。無事でよかったです」

「奈央ちゃん…」

「功さん…」

「（反応が私たちと全然違う…）」

恵と香奈ちゃんが不機嫌そうな視線を向けてきてるが、今は気にならない。

なんて良い子なんだろ？

「ちよつとちよつとお兄ちゃん…なにしてんの…?」

まだ騒ぐ妹。

「兄が抱き寄せていいのは妹だけなんだよ！」

「はいはい。奈央ちゃんホントにありがとう」

「おおなりつ！？兄は妹を無視しちゃいけないんだよ！」

奈央ちゃんをそっと離すと、少し名残惜しそうな顔をする。  
なんてかわいい子なのだろうか！

「こんなに良い子でかわいいのになんで…」

「功さん……恥ずかしいです……」/ /

「なんで悟の妹なんだ！」

そう、奈央ちゃんは悟の妹。

間違つ」となく悟の妹。黒川奈央。

「なんで俺の妹じゃないんだ！」

「お兄ちゃんー…さすがにそれは冗談でも傷つくな…」

「大丈夫だ美香。もちろんお前が」

「お兄ちゃんーー」

「一番田に良い妹だぞー！」

「一番田は誰…？美香、ちょっとオハナシシテクルヨ…？」

最後が片言になり、不気味な雰囲気が美香のまわりに漂い始める。

「功くん、それわりまづくない？なんか怖いんだけど…」

「美香が人間じゃなくなる前になんとかしてくださいー！」

「（「ククククシ…）」

確かに口からおよれ呼吸とも思えないような変な音が聞こえてくる。  
さすがに冗談が過ぎたか？

「冗談だ、一番は美香に決まってるだろ？」

「本当ーお兄ちゃん」

「多分」

「ホントウ? オーライチャン」

「本當だ、天地神明に誓つてもこい」

「私もだよお兄ちゃん!」

「ふつ、一瞬寒気がしたぜ。」

「変な冗談なんか言わなきやいにのに!」

「悪いな。これはもう癖みたいなものだ」

「まあ私は功くんのノリがいいところ好きだけだ!」

「俺も恵と話したりするのは好きだな」

本心から思つていいことなので、少し恥ずかしかつたが素直に口に出せた。

しかし似たようなことを言つた恵は顔を真つ赤にして恥ずかしがつている。

「な、なんか恥ずかしくなつてきたな」

「や、そうだね!」

「「「……」「」」

中等部の三人からジト目で睨まれる。

もの凄く居心地が悪くなってきた。

「さて、クレープ食いに行くか恵！」

「そうだね功くん！」

大げさにテンションを高くして誤魔化すしかできなかつた俺たちだ  
つた。

#3 いつも風景 3 (後書き)

本当に進まないです。

「好き嫌い」（前書き）

自分は鮪が嫌いです。

「好き嫌い」

功「あー田覚めるわー」

恵「まーたブラックコーヒー飲んでるの?」

美香「お兄ちゃん好きだねー」

功「飲むとスッキリするんだよな」

恵「苦いのにスッキリするかな?」

功「それは慣れの問題じゃないか?」

恵「私はこつまで経つても飲める気がしないよー」

功「恵ちゃんはお子ちゃまですもんねー?」

恵「私はこつまで経つても飲める気がしないよー」

功「いろんなもの飲めても飲めなくとも変わんないから気がしなくていいよー。」

美香「お兄ちゃん弱つー。」

功「殺されそうなほどのフレッシュヤーを感じたんだからしうづがないだろ?」

恵「やうなの? ( 一一口 ) 」

功「自分の間違いに気づいたんだよ」

美香「お兄ちゃん…」

恵「ほらー馬鹿な」としてるからわがの美香ちゃんも失望して

美香「弱いお兄ちゃんも良いねーーー」

恵「なかつた?ーーー」

功「嫌われないのは良いんだけど、素直に喜べないんだよな…」

恵「喜んでたらズン引きだよ…」

美香「なんですよーーー妹に褒められた兄は喜ばない」といけないんだよ  
?「

功「あれは褒められたのか?」

恵「美香ちゃんの兄の定義がすげー变成になるよ…」

美香「別に普通だと思ひけど」

恵「それはないよー」

功「ああ、ないな」

美香「聞く前に否定しないでよーーー」

恵「じゃあたとえばなにがある?」

美香「兄は妹に隠しじ」とをしてはならない

功「俺のプライバシーはどこにある?」

美香「大丈夫だよーお兄ちゃんの」とは何でも知ってるからー

功「すでにはないのか?..」

恵「まあさすがにそれはないと思つたけど、じゃあ功くんの食べ物の  
好き嫌いは?」

美香「好きなのはチーズだよ。特に裂けれるチーズを裂かないで食  
べるのが好きなんだよね」

功「.....」

美香「それで嫌いなものはリンクときのことウーで、他にもあるけ  
ど特にこの3個は苦手みたい。リンクは気がついたら嫌いになつて  
たけどリンクゴジュースは飲めるつて変だよね?きのこは味が徹底的  
に嫌いで、ウーは前プリンに醤油をかけたような味つて聞いてから  
苦手になつたんだよー」

恵「...すごい詳しいけどあつてるの?」

功「...全部あつてる。しかも教えたことない」とまで知つてゐるーー

美香「言つたじやんーお兄ちゃんのことならなんでも知つてゐるつ  
ーー!」

恵「冗談じゃなかつたんだね…」

功「冗談であつてほしかつた…」

恵「それにしてもねえー」

功「恵からもちよつと壇つてやつてくれよ」

恵「裂けれるチーズは裂きなよ?」

功「それはほつとけよ…」

「好き嫌い」（後書き）

ツナ缶は好きなんですが。

## 「あこつえお作文」（前書き）

閲覧ありがとうございます。

年明けに中古店でWii+過去発売済みのWii専用ソフト全てが入った福袋があると友人に聞きました。値段は99万円だそうです。

## 「あこつれお作文」

恵「あやつー地震ー?」

功「結構でかいなー」

悟「まだ揺れてるよー」

恵「…おわせたかな? びっくりしたー」

悟「携帯の速報で今の震度4だつて書いてあるよー」

功「今ので震度4か。もし震度30とかだつたらどうのへりこられるんだ?」

悟「それは地球滅亡レベルだよー」

功「けど実際もつと強い揺れが来たら相当荒てるだろ? なー」

恵「そりだよねー。」「おすし」とか気にしちる余裕ないよねー

悟「おすし?」

功「おそれなー すばやく しづかにひやつだなー」

功「ああー僕が知つてるのは「おかし」だったからわからなかつた

「よ

功「結構いろいろなのがあるみたいだからな。けど意味はだいたい一緒だろ」「

恵「そういうのつてあいつえお作文つていうんだよねー」

功「よく自分の名前で作ったりするよな

恵「そう? 私はやったことないなー」

悟「僕もないね

功「マジでー? 一度は通る道じゃないのか?ー」

悟「そんな大げさに驚かなくとも……」

恵「じゃあやつ功くんは作ったことあるんだ?」

功「何回がある?」

恵「どんなのどんなのー?」

功「『』『』『』それが『』『』『』運命

悟「無駄にかっこいいー!」

功「『』『』恋と『』『』裏切り

恵「なんか毎日ラのテーマみたいだねー」

功「」んな感じだな。一文字だから作りやすいんだよ」

悟「なんか想像してたのと違ったよ……」

惠「三文字だと難しいかなー？」

功「いや、すぐ作れるんじゃないか？」

恵「ホントー? じゃあ私の名前で作つてみてー!」

功一『ああ、さういへば、アーヴィングの『耳の中』

「…そんな」也没什么好…！…」メーリーは懶れ声で呟く。

功・しゃあもーどいしのを

## 普通のお愿いれ〔三〕

功女神性化したみたい

馬に付ける事

功一「最初のよりはしゃいたる？」

恵、それはそうだけや。普通に恥ずかしいよー

功「じゃあ次は

恵「ちょっと待って！次は黒川に作ってあげてよ！」

悟「え、つ？僕はいいよ！」

惠「遠慮しないで作つてもらこなよー。」

悟「絶対に中傷するような内容だから嫌だ！」

功「大丈夫だ。今回はまじめに作るから！」

悟「本当かなあ……。つていうかなんでそんなにやる気なの?」

功一なんか楽しくなつてきただけだから気にすんな

惠一功ぐんは時々よく分かんないと云つたよねー」「

語・語感はん語に生れないのはね……」

功  
よし！ できたぞ！」

惠でござりハセー。」

功一『や』 晩『ひ』 イイレ『る』 ルルルル『』

悟・中傷はそれでないけどイメージは蠱惑だよ!!!!

惠 - シ - カ - あ - 一 - :

悟「伊藤も引かないでよ！功が勝手にいつてるだけだよ？！」

## 功「不満か？」

悟「満足するはずないでしょー。」

功「しようがないな。じゃあもう一個考えてやるよ。まつたぐ…」

悟「え？ なんで僕が譲歩されたみたいになつてるので…」

功「できただでー。」

悟「はやつーー！ 絶対うくなのじゃないでしょー。」

功「『『れ』』 最近 『と』 父さんと 『る』 ルールルルー 」

悟「やひぱつーー！ しかもわざわざよつもひびこじやんーー。」

恵「…………」

功「家族の在り方つていろいろあるんだなあ」

悟「そんな田で見ないでー！ 僕も父さんも至つて健全だからー。」

悟「そうかもしないけど僕の家は違つよーー！ ってか元凶がなに言つてゐるのセーー。」

功「なんだよ？ まだ不満か？」

悟「むしろわざわざよつも不満が増えたよー。」

功「しようがないなあ。じゃあもう一個だけ 」

「...アーティスト...アーティスト...」

## 「あいつ&お作文」（後書き）

定価を考えれば安いですが、99万円は高いですよね。  
安いのに高いっていうのもおかしいですが。

## #4 こつもの風景 4 (前書き)

閲覧ありがとうございます。

三連休だといふことを今日知りました。

結局五人でクレープ屋に向かうことになつた。

中等部の三人と背が小さい同級生一人で。

見ようによつては年下を侍らせてるように見えるんじやなかろうか

…。

「…」

何気なく少しだけ歩く速度を遅め、四人が前に行くよつて調節する。ちょっと被害妄想がすぎるかも知れないかとも思ったが、どこで誰に見られてるかわからないからな！

「お兄ちゃん？どうして後ろ行くの？」

「功くんはまわりの目が気になるんだよー」

「男の人は功先輩だけだもんね」

「しかも年下の子ばっかだからねー。ロリコンに見えるかもねー」

「…」

一瞬で、しかも完璧にばれていた。恵たちの洞察力に戦慄する。

「やつこえば今日はつちの兄は一緒にないんですか？」

と、奈央ちゃんが今さらな質問をしてきた。

ちなみに、この中で兄がいるのは美香と奈央ちゃんの二人のみ。香奈ちゃんには姉が一人いる。

美香は俺のことをお兄ちゃんと呼び、奈央ちゃんは悟の「J」とを……えつと、なんて呼んでたかな？

俺たちの前では「うちの兄」とかだが、よくよく考えてみれば悟と奈央ちゃんが話しているのはあんまり見た覚えがない。

「ホントにかわいそうだな。

「功さん? どうかしましたか?」

「ん? ちょっと哀れな友人にメールを送つてたんだ」

「?」

「それより最初に戻るけど悟は今日は帰つたよ」

「珍しいね! お兄ちゃんと悟さんつてよく一緒にいるのに」

「ああ、ちょっと色々あつてな」

「せつだねー」

俺が苦笑するのに合わせて、悟も苦笑する。

「恵がドリーブりを発揮してな。悟におまえは だ! とか、B! だ! とか罵つてたら帰つてつた」

「ちよちよちよつと! 真実がねじ曲がつてるんだけど! ...?」

「恵先輩ってどうだったの！？人は見かけによらないってホントだつたんだ…」

「香奈ちゃん信じてるの…？っていうか声でかいよ…」

「お兄ちゃんをMにはさせないからね恵ちゃん…」

「だから違うつてば…！功くん誤解といつよー」

「はつはつはつはぶつ…！…！」

「功くん 誤解といつくれるよ…？」

高みの見物をしているかの、Jとく笑つていたら横腹に強烈なパンチが飛んできた！

今日は腹に強打が入りすぎな気がする。パンチを打つてきたほうを見ると、笑顔でこちらを見つめている恵さん。

怒ると笑顔になる恵だが、これが結構怖かったりする。

普通に怒られるより、笑顔で怒られるほうが怖いことつてあるよね？

「すいませんでした女王様…。はつ！迫力につられて思わず言つてしま、「フツ…！」

「ふふふ。功くんも懲りないねえー」

「はい…。すいませんでした…」

「まつたくーもうやめてよね」

二人とも「冗談でやっている」とはわかりきっていたので、あっさり許してくれる。

その一方で…

「「「ドウ女王様…」」」

三人組は若干ビビっていた。

#4 こつもの風景 4 (後書き)

短めでいいません。

もつとキャラ数を減らせばよかったですかなと後悔します。

「差」（差額）

閲覧ありがとうございます。

## 「差」

功「へー。それでどうなんだ?」

悟「えつと最後は」

功「あ、あれ奈央ちゃんじゃないか?」

悟「え?ホントだ」

功「よく本屋で会つけどよっぽど本が好きなんだなー」

悟「本屋で会つたことあつたんだ?」

功「ああ。奈央ちゃんから聞いてないのか?」

悟「…奈央とはあまり会話がないからね…」

功「それは悪いことを聞いたな…」

悟「いや、大丈夫だよ…。慣れてるから…」

功「それにしても奈央ちゃん良い子なのになんで悟は嫌われてるんだ?」

悟「それは僕が聞きたいくらいだよ」

功「今度聞いてみるか」

悟「やめてーそんな残酷な」とはー」

奈央「…ん？あ、功さんー」

功「こんこちは奈央ちゃん」

奈央「こんにちはー功さんも何か本探ししているんですか？」

功「いや、今日は話に付き合つてここまで来たんだ」

悟「よ、よつ

奈央「また漫画買いに来たの…？」

悟「え、まあそつだけど…」

奈央「たまには小説とか読まないの？こつまで経つても漫画ばっかりだし」

悟「僕も小説くらじ読むよ。ラノベだけビ

奈央「…」

悟「別にいいじゃないかー功だつて漫画もラノベも読むよなー？」

功「まあ悟ほらじがないけどー応な

奈央「そつなんですか？今度功さんのお勧め教えてください

悟「僕とは天地の差がある反応だねー？」

奈央「功さんは一般小説も読むからいいんです」

功「じゃあ何か考えておくよ」

奈央「ありがと」「やります!」

功「そういうえばこの間奈央ちゃんに借りた本す」「よかつたよ」

奈央「良かった! あれ私もす」「感動したから誰かに紹介したかつたんです!」

功「それでなんだけど、美香も読みたって言つから貸しちゃったんだけ大丈夫かな?」

奈央「美香ちゃんなら全然大丈夫ですよ」

功「ありがと!。奈央ちゃんはやつぱり優しいね」

奈央「そそそんなことないですよ!」

功「そうだね。僕には優しくないからね」

悟「どうか? 照れてるだけだろ?」

悟「そうだつたらどれだけいい」とか…」

奈央「あ! そういうえば功さんの好きな探偵シリーズの最新刊買いましたか?」

功「もう出たのか…」

奈央「あっちのパートナーにありましたよ?」

功「ちょっと見てきていいかな…?」

奈央「わ、私も一緒にいいですか?」

功「もちろん。教えてくれてありがとうございます」

悟「あの、僕はどう」

功「あ、悟は自由に見てきていいぞ」

悟「あ、そう?」

功「ああ。じゃ」

悟「…」

T「おっ、黒川ちゃん。なにボケつとしてんだ?」

悟「ちょっと仲間外れにされてね…」

S「なるほど。また大藤と伊藤か?」

悟「いや、功と妹にね…」

T 「黒川の妹つて確かに中等部だつけ？」

S 「俺大藤がす」く良い子だつて言つてたの聞いたぜ？」

T 「それは俺も聞いたことあるな」

悟「功にとつては良い子なのかもね…」

T 「どういってんだ？」

悟「僕は嫌われてるみたいでさ。なんかもう功が本当の兄みたいに感じるくらいだよ。ははつ」

S 「自嘲するなよ。さすがに思いつめすぎだつて！」

悟「あれを見てもそんなことが言えるかな…？」

T 「…すい」に仲良さそつだな

S 「…確かに大藤が兄に見える」

悟「なんでこんなに差があるんだ？」

T 「すまない…。全くわからん」

S 「それにしても、黒川は妹にまで」

悟「それ以上言わないで！きっと精神が耐えられないから…」

S「あ、ああ。すまない」

T「え、えうだー。今日は俺たちと一緒に遊ぶかー？」

S「それがいいなー。黒川がいれぱれっと楽しけりだぜー。」

T「あ、あつがどつ…。嬉しこみ…」

T「じゃあこくかー」

」の日以来、TとSはとても優しくなったところ。

## 「差」（後書き）

オチをどうつけるか考えてたら、終わってしまいました。  
やつぱり先に考えておかないと駄目ですね。  
この回は忘れてもらつても構わないです。

## 「パンシ」（前書き）

閲覧ありがとうございます。

## 「パンジ」

功「男子って小さい頃はブリーフ履いてたよな?」

悟「僕はそうだったね」

功「俺も10オケらいまではブリーフ履いてたな」

恵「……」

悟「けどだんだん柄パン派が増えてきて、ブリーフが途端に恥ずかしくなってくるんだよね」

功「そうそう。『え、お前まだブリーフ履いてるの(笑)』みたいに言われるんだよな」

悟「今にしてみれば大したことじゃないけど、その当時はそれが言われるのが嫌だったなあ」

功「それで、気が付いてみれば皆柄パンを履いてたみたいね」

悟「ちなみに僕は今でも柄パン履いてるよ。楽なんだよね」

功「ブリーフはなんか窮屈だよな?その点柄パンは解放感があると  
いうか」

恵「……」

悟「功はどうなの?」

功「俺はいまはボクサーパンツだ」

悟「そうだったんだ。僕は履いたことないけどあれも窮屈そうに見える」

功「いやいや。伸縮性があるからそれは大丈夫だ。しかもかなり動きやすい」

悟「へー今度試してみようかな」

功「それがいい。ボクサーパンツはお勧めできるぞ」

恵「……」

悟「けどブリーフって大人になつてまた履いてるイメージがあるんだよね」

功「それはわかるな。父親つてブリーフ履いてる感じがする」

悟「実際うちの父さんもブリーフだしね」

功「その原点にかえる理由はなんなんだろうか?」

悟「うーん。わかんないけど僕たちもいつかまたブリーフを履くことがあるかもね」

功「そうだな。まあまだ先のことだけは思ひけどな」

悟「で、ボクサーパンツはどこで買つたらいいかな?」

功「どこのでもいいんじゃないかな?俺もメーカーにこだわってるわけじゃないし」

悟「そつか。じゃあ駅前のあそこで買おうかな」

功「ああ、俺もそこで買つたよ」

惠「…………あのー。すみじく話に入りづらいんだけど……」

功「あーすまん。なんか盛り上がりやつて」

悟「そうだね。じめんじめん」

惠「まあいいけどー。私も話こじれてよー」

功「わかつたよ。じゃあ恵は今どんなパンツ履いてるんだ?」

惠「それはセクハラだよー?もつと違う話に入れてーーー」

功「じゃあ恵はどこでパンツ買つてるんだ?」

惠「それもセクハラ!ーーーパンツから離れた話題にしてよーーー」

功「いやだって話に入りたって言つからパンツについて話したいのかと」

惠「違うよーーーパンツはもつといいかーーー」

功「じゃあグラジャーにひこて

恵「もうセクハラしたいだけでしょ！？しかもそれについて話せるの私だけだし！…！」

功「悟も話せるだ？前つけてたもんな？」

悟「そんなわけないでしょ！？完全に変態じやん…っていうか僕をオチに使わないでよ！」

功「このままだと俺がセクハラばっかしてるみたいになると思ってな」

悟「保身のために友達を売ったの！？」

功「自分の身は自分で守らないとな」

悟「最低だ…！」

恵「一人で言い争つてるけど、一番の被害者は私だよね…？」

## 「パンツ」（後書き）

10分で書けました。  
それがなぜか空しいです。

## #5 こつもの風景 5 (前書き)

閲覧ありがとうございます。

すっかり忘れていて七草粥を今日食べました。

所変わつて現在、マイホーム。

大藤家である。

夕食後、居間でテレビを見ながら家族が集まつてゐるいつもの光景があつた。

しかし今田は疲れたなー

結局あのあと、恵にクレープを奢つ（三個）せつかくだからと美香、香奈ちゃん、奈央ちゃんにも一個ずつ奢つた。べ、べつに見栄張つたわけじやないぞー。

「お兄ちゃんは誰に言つてゐるの?..」

「心を読むのはやめろ」

ちなみに、クレープ屋まで行くのには学園からゆきへり歩いても15分もかからない。

はずなんだけど、今日は学園を出てから1時間以上もかかっていた。まったく、悟や恵、美香はすぐふざけるからどうしようもないな。

「お兄ちゃん、自分の事は棚にあげるんだね」

「妹よ、なぜ兄の考へてることがわかる?..」

さつきはスルーしたが、「こりゃではつせつせとかないとなー。プライバシーは皆に平等にあるべきだ!..

「え? だつて兄妹だし当然でしょ?..」

だつて兄妹だし当然でしょ?  
……根拠になつてなくない?

「……仮にその説明が正しかつたとしよう。しかしそうすると俺たちは兄妹じゃなくなるんだが」

「そんなことないよ! だつてお兄ちゃんも私の考へてない」とわかるでしょ?」

「「めん。全然わからない」

そして、あんまりわかりたくない。

「まじで? ……それでも兄なの?」

「……なんで俺がそんな常識外れの人を見るよつたとで見られてるんだ?」

「けどお兄ちゃんが義兄かあ…。それもいいなあ

この妹は底が知れないな。

兄としては不安でしようがない。  
自分の身も不安でしようがない。

俺、きれいなままで婿に行けるんだろうか…? ?

「功ちゃん、あんまり心配しなくても大丈夫よ?」

「母さんにも心読まれてゐる…?」

「楽しそうだからやつてみたわ」

「そんな軽いノリで？！」

誰でもできるの？！」

まさかホントに俺が常識外れなのか？

「美香ちゃんはお兄ちゃんが大好きなだけなんだから。むしろ喜んでいいんじゃないかしら？」

「それはそうだけど……」

「他の『家庭』ではあんまりないことらしいわよ？」

「それは身近に例がいるからな……」

確かに喜んでいいのかもしない。

いや、実際嬉しいと思つ気持ちがないわけじゃない。

「ただなあ……。愛が重いんだよな……」

これって恋人に言つセリフじゃないか？

しかもあまり普通じゃない恋人に。

「あらあら。まるで恋人みたいなこというのね？」

「う、う……」

思つていたことを母さんにはばり言つてしまつた。  
あれ？でも今は心を読まれてなかつたみたいな言い方だつたな  
つてことはやつきのはホントにノリだけでやつてたのか！？

我が母親ながら恐ろしいな…

「兄妹はもはや恋人と同じだよお母さん…」

「美香ちゃんは将来お兄ちゃんのお嫁さんかしらねえ？」

「わいだよー」

「これ、中2の娘との母親の会話だって信じられるか？」

「あの、兄妹って結婚できないって知ってるか？」

「お兄ちゃん法律なんて信じてるの？」

「あれは信じる信じないってもんじやないからー。」

都市伝説みたいな扱いすんなよー

「それより美香ちゃん、お風呂沸いたから入ってきただら？」

「はーいー覗くなら10分後がお勧めだよ、お兄ちゃん

「10分後に何かあるのかー？」

「来たらわかるよー」

ちよつと気になるな…  
いや、覗かないよ…

「……」

「……」

一人騒がしい妹がいなくなり途端に静かになる居間。  
今、大藤家は3人家族で父親は俺が4歳の頃に病死した。  
その頃は3歳違いの美香はまだ1歳だったからあまり覚えてないだ  
ろうけど、母さんがひどく憔悴していたのを覚えてる。  
それが嫌である頃は母さんに元気を出してほshくていらうとしたつ  
けなあ……

「うふふ。ホントにあの頃から功ぢやんは優しくて、お母さんはず  
つと頼りにしているのよ~。」

「母さん……」

「いー話なのにわづげなくまた心読まれてるな……。

「だから美香ちゃんのことも安心して任せられるのよ」

「それは兄としてでいーのかな?」

「もちろんお嬢さんとしてでもこーのよ~。」

「兄としてまかされます」

うふふ。と笑い[冗談を言つ]母さんだが、急に真面目な、それで  
いて少し申し訳なさそうな顔で言つた。

「あれと……父親としても」

「…」

「「」みんなさー。本当なら美香と3歳しか変わらないあなたに頼む「」じじやないんだけれど」

「謝る「」じじやないよ。それに昔から母さん」に頼られるのは好きなんだ」

「ありがとう功ちゃん。美香にあなたがいてくれれば何も心配ないわ」

「それは過大評価が過ぎるよ」

さすがに照れくさくなつて、そっぽを向きながら少しうつ答える。

「あらあら、照れなくともいいのよパパ」

「お願いだから外では呼ばないでくれよ?」

「ついでだから私の夫にもなつてもうおつかしく?..」

「それはついでで済まされるレベルじゃない!」

だつて母と息子だぜ!?

仰天していたら、風呂上がりの美香が小走りで居間に戻ってきた。

「お風呂上がりたよー。次はお兄ちゃんが入つてねー私の次にー!」

「なんでそんなに強調するんだよ…」

入りにくこじやねえか！

「あいあい、『お母さん』よダーリン」

「ダーリンって何ー？」

「この間にか夫にやれてるー？」

「お母さんへこへりお母さんお兄ちゃんは渡さんことよー。」

「あいあい、美香ちゃんにはお兄ちゃんはまだ早いことわ

俺、対象年齢とか決められてるんだろ？

「そんなことないよーお兄ちゃんの扱いなら絶対負けないもん！」

「それなりお母さんも負けないわよ？」

「風呂へってきます…」

わづか全に物扱いになつてゐるじやんと思ひながら、これ以上巻き込まれる前に退散する。

しかし、毎回のことで疲れはあるが、あれはあれで一つの家族の形なんだと思つてじりじりしても嫌とは思えなかつた。

深夜、寝る前にどうしても確認したいことがあり美里に電話した。美里はいわゆる幼馴染で、香奈ちゃんの姉である。

悟に電話しようとも思つたが、そりこねば今日は泣いて帰つた」と  
を思い出したやめた。

めんどくせうだからな。  
程なくして電話が通じた。

「もしもし美里か?」

『やうだナビ、こんな時間に珍しいわね』

「ちよつと聞きたこ」どがあつてな

『やうこえは私も言いたい』どがあつたんだつた

「やうのか。じゃあ美里からでこや

『やう? まあ 今田香奈にクレープ買つてくれたみたいだからそのお  
礼をね』

「そんなの全然気にしなくていいのに

『恵と美香ちゃんと奈央ちゃんにも買つてあげたみたいね? ずいぶ  
ん優しいじゃない?』

「なんか言い方に棘がないか?」

『かわいい女の子の中でも嬉しかったでしょ? ね』

「お礼せざるにこつた? 」

急に不機嫌になつたな! 気づいたら棘だらけだよ! 」

『まあいいわ。それで、あなたはびびったの？』

「ああ、ちよつと確認したことがあるんだけどな

『私で答へられることなら答へるけど』

「助かる」

『ここのへりこいいわよ。それで確認って？』

「ああ。兄妹だと心を読み合ふるつて本当か？美里んとこは姉妹だけどじうだ？」

『……なにか疲れる』ことでもあつたの？』

とても優しい声で心配された。

おやじく脳の心配をわれてる感じ。

「待て！誤解だ！俺の脳は今日も正常運転してる！』

『ホント？けどそんな非現実的など言ひだすなんてお脳がおかしくなったのかと』

『お脳いつなーちゃんとした理由はある』

『ふーん。で、その理由とは？』

『美香と母さんが俺の考へてることを読みとつてるみたいなんだ』

俺は幼馴染に何を言つてゐるんだろう?  
もしこんなことカウンセラーに相談でもしそうものなら確實に病院  
を紹介されると思つ。

『あーあの2人は特別よ。一般的な兄妹はそんなこと無理だから』

「あつやつ言つんだな」

『まあ前から知つてることだしね』

…やつぱつうちの家族は変なんだな。

『やつか。けど常識が再確認できたよ。ありがと』

『いいけど、それが聞きたかつただけ?』

「やつだ」

『ふ、ふーん。それだけなんだ』

「ん?なんかあるのか?」

『別に?』

「別につてお前…」

『そ、それじゃあおやすみー。』

「ああ、おやすみ」

何だつたんだ？

## #5 こつもの風景 5 (後書き)

さうやく作品の中の一冊が終わりました。  
難しさを実感しております。

「日本」（前書き）

「日本」は悪い時だけ信じるよつとしています。  
閲覧ありがとうございます。

「占い」

恵「はあ～」

功「どうした?」

恵「運勢が…」

悟「運勢?」

恵「うん…。朝の一コースで運勢が最悪だったの…」

功「あー、わいにや恵は占いとか好きだもんな」

悟「まあ大抵の女の子は占いの好きだよね」

功「でもそんな落ち込む必要もないだろ。占いが全て当たるわけでもないし」

恵「やうなんだけど…。今日の運勢はいつもよつよつ…」

功「ほーどんな運勢だったんだ?」

恵「やるいとなす」と金で裏田にでる一田になるでしょ?」

功「まあ確かに最悪な運勢だけど、そんなに落ち込むほどのもんでもなくないか?」

悟「占いの最下位の常套句だよね?」

恵「えらい」「元

功「ん？ 続きがあるのか？」

恵「さらにあなたが行動すれば周りの人に迷惑が降りかかるでしょう。そして何もしなければ普段親しくしている人に恐ろしい災いが降りかかることになるでしょう。……だって」

功「ホントに最悪な運勢だな…どうしようもねえじゃねーか！」

悟「け、けどラッキーアイテムとかあれば…」

功「そ、そつだな！ ちょっとは運勢があがるだろ…」

恵「ラッキーアイテムは一応あつたけど持つてなくて…」

功「そんぐらい俺らで用意してやるよーなー！」

悟「そうだねーそのへりこはさせてもうひつよー」

功「だから言つてみるー。」

恵「火星人」

功「火星人？」

悟「アイテムですらないじゃんー！」

恵「準備してくれるんでしょう…？」

功「いや、いやいやいや無理だから！」

恵「嘘だつたの！？」

功「嘘つていうか、地球に住んでいる限りは……な？」

悟「うん。僕らじゃ大気圏は突破できないからね……」

恵「じゃあ功くんが火星人になつてよ！」

功「即席火星人で効果でるのか！？つてかなんで俺？？」

悟「いないよりかはマシなんじゃない？」

功「悟でいいじゃん！」

恵「功くん！」

功「う、つ……」

悟「あきらめなよ」

功「……」

クS「……」

クT「……」

クW「……」

美里「…あんたたち、来たと思つたらなんで手つないでるわけ？」

功「俺、今日は火星人なんだ…」

美里「…恵?ビリ?」と?」

恵「功くんは今日ラッキーキーアイテムだから持つてなきゃいけないの」

美里「…黒川?説明してくれるよね…?」

悟「しますしますーするから怒らないでー…つてなんで僕がこんな田に…」

美里「なにかいつた?」

悟「いえ…言つてないです!」

美里「で?ビリ?」と?」

悟「それがかくしかじかで…」

美里「かくかくしかじかじやわかんないわよー」

悟「え!?文字通りに伝わるの!?便利な機能はないの!?」

美里「わけわかんないこと言つてないで早く説明して！」

悟「はい！今日登校中に伊藤が…」

悟「で、功が火星人になつてるつてわけ」

美里「あいつも人が良いとかなんとか…。けど後が大変そうね」

悟「あと？」

美里「絶対火星人は噂になるわよ」

悟「確かに…。けど功はなんかふつきれたみたいだよ」

功「S、火星人と握手したいか？」

クソ「あ、ああ。ぜひ…」

功「…あれは自棄になつてるだけでしょ…」

美里「…あれは自棄になつてるだけでしょ…」

後輩A「ねえねえ、あれが火星人先輩じゃない?」

後輩B「ホントだ!握手してもらう!...?」

功「ははは...」

恵「よ、よかつたね!人気者だよ!」

功「ああ、そうね...」

恵「うつ、ごめんね...」

功「いや、気にすんな...」

後輩A & B「火星人先輩!握手してください!」

功「あははは...」

## 「中」|「病」|「ハ」（前書き）

閲覧ありがとうございます。

適当に考えたので果たしてこんな遊びがあるのかは知りません。  
作者もやつたことがあります。

「中一痴」(1)

功「…………なんで俺の部屋にいる?」

美香「観察してるの」

功「へ、へえー。一応聞くけど何を?」

美香「お兄ちゃんだけど?」

功「…………楽しいか?本読んでるだけだけど」

美香「うんー興奮するー。」

功「興奮ー?なしてー?」

美香「それはねー」

功「いや、言わなくてもいいー。」

美香「…そう?」

功「なんでそんなガツカリするかな…。あーなんか本も飽きてきた  
なあ」

美香「じゃあお兄ちゃん遊びまつ?」

功「いいけど…なにするんだ?」

美香「中一病」ハ「...」

功「なにそれ...?」

美香「おまえ」との中一病バージョンだよ

功「だよって言われても...。なんでもまたそれなんだ?」

美香「私中一だからちよつといこかなーと思つて...」

功「全然納得できる理由じやないな!」

美香「じゃあお兄ちゃんは何かしたい遊びがあるの?」

功「いやもうこいつわけじやないけど」

美香「ないのに私の提案した遊びを否定するの?」

功「否定してるってわけでもないんだが...」

美香「そういう半端な態度つて一番困るんだよね」

功「...すいません。ってなんでこんなに責められなきゃなんないんだよ!」

美香「お兄ちゃんが中一病」ハ「...」に難癖つけるから...」

功「そりやつけたくもなるわ!絶対恥ずかしいだろ!」

美香「いこじやん...やつてみたいんだもん!」

功「まあ二人だからいいけどな…」

美香「ホント…？ ありがとうお兄ちゃん！」

功「で、どういう役割でやるんだ？」

美香「私が襲われる少女役で、お兄ちゃんが少女を助ける少年、あとお兄ちゃんが少女を襲う魔人役でやろう…」

功「ちょっと待て！ あたかも3人いるみたいに役割を割り振つてのけど俺だけ2役つてことには気づいてるからな…？」

美香「だつて少年はお兄ちゃんしかできないし、魔人も男の方が適任でしょ？」

功「ぐつ…でも正義と悪の2役はさすがに一人じゃ無理があるだろ？」

美香「お兄ちゃんの演技力なら大丈夫だよ…」

功「生まれてこの方演技なんかまともにしたことなんてないわ…」

美香「もう…あんまり文句ばっかだと個人情報流出させるとよ…」

功「それは洒落にならないからやめろ…」

美香「じゃあやつてくれる？」

功「この状況でうなづく以外の選択肢は選べないだろ…。で、どん

な設定で話が進むんだ？」

美香「まず普通の少女だった私がたまたま通りすがつた中一病魔人に襲われて、そこで中一病少年が少女助けだすところから始めよう！」

功「中一病魔人つてもはや人間だろー？」

美香「実際魔人なんていないからね！」

功「なんでそこは現実的…。あと！薄々気づいてたけど中一病なのは俺の役だけかよーーお前が中一病ごっこしたかつたんじゃなかつたのか！？」

美香「だつてどんな」と言えぱいいのかわからないんだもん

功「なんでさも当然のように俺が中一病なセリフ言える」とになつてるんだ！」

美香「お兄ちやん言えないの？」

功「…………言える」

美香「ならいいじゃん！」

功「いやでもな」

美香「流出」

功「さて、さつそくやるか？」

美香「うんーお兄ちゃん大好きー！」

功「……ありがとう」

「中一病」（後書き）

続きます。

自分でも続くと思わなかつたです。

「中 | 漢 | ハ | ハ | 」（前書き）

閲覧ありがとうございます。  
前投稿の続きです。

功で、居間にきたわけだがどうやつて始めればいいんだ？」

美香「少女が歩いてたら突然魔人に遭遇するシーンからやろう！あとはそのまま成り行きでね」

功一脈絡もなにもあつたもんじやないな……」

美智 - じやあ始めるよ -

功・そもそもこ・こ遊ひ・てこんなんた・たか・?

お兄ちゃん、姫めでたし！」

四庫全書

美香「『ふう…』の年にもなると買い物も大変じゃの…』

功「はいストップ！！！」

美香「なんで？」

功「それはこっちの台詞だ！明らかに少女じゃないじゃん！これ絶対おばあちゃんだろ！」

美香「えー？ これ少女だよ？」

功「何をして信じればいいの！？」

美香「だつて体は少女で精神は老女の16歳設定だから少女でしょ？」

功「初耳なんだけど……なんですかいやにここのにそんなトンヒトモ設定加えるんだよ！？」

美香「だつてだつて私の役だけ普通なんだもん！」

功「普通でいいんだよ！俺の役が異常なだけだから！」

美香「お兄ちやんがそういうなら……」

功「なんか俺が我儘言つてるみたいになつてるのが納得いかない……」

美香「じゃあ今度は普通の少女でやるね？」

功「頼むぞ。早く終わらせたいんだから」

美香「『買い物ちょっと長引いちやつたな…。暗くなつてきたし早く帰らなきや』」

功「『我が魔眼が疼いている…。今宵も闇をさまよつ子羊が近くにいるようだな。フフフ…フハハハハ…さあ来るがよい…その身を我が闇の眷族としてくれようぞ…』」

美香「『なんか暗くて不気味だな…。今日はバスで帰るつと』」

功「バスは乗るな！！」

美香「でも普通の少女なら帰りが遅いとバスとか使うと思つて。前にお兄ちゃんも私に遅くなるならバスで帰つて来いつて言つてくれたし！」

功「確かにそうなんだが、バス乗つたら魔人と遭遇できないだろ？」

美香「あ、そつか。忘れてたよ！」

功「帰りは徒歩で頼むぞ？」

美香「うんー。じゃあわざのお兄ちゃんの台詞の続きをからやるね」

功「ああ」

美香「『』の道何か暗くて不気味…。あ、ちょっと先に誰かいるみたい』」

功「『良くなき羊よー嬉しく思え！我が闇の眷族として永遠の命をくれてやるー』」

美香「『あ、もしもし警察ですか？今ちょっとおかしな人に絡まれちゃつて。ええ、場所は駅近くなんで交番のすぐそばなんですけど』」

「

功「冷静に対処すんなよ！－国家権力呼ばれたら中一病少年の出る前に魔人負けるわ！」

美香「魔人つて警察に負けるの－？」

功「手も足も出ずにな！所詮自称魔人の人間だから－お前が中一病魔人つて言つたんだろ！－？」

美香「もしかして中一病つて弱いの？」

功「弱いつていうか…そもそもお前中一病つてなんだかちゃんとわかつてるのか？」

美香「不可能を可能にする人たちでしょ？」

功「そんな奇跡はおこせねえよ－－！」

美香「だつて、すいじい台詞言つてる」

功「あれば言つてるだけなの－イタイ発言するのが中一病つていうんだよ」

美香「そうなの－？全然ダメじゃん！」

功「なんだよ…。勘違いしてただけか。じゃあこの遊びも終わりだな」

美香「ごめんねお兄ちゃん…。私の勘違いで変なことお願いしちゃつて…」

功「…まあ今回せここよ。『氣にしなくていい』」

美香「ありがと!お兄ちゃん…じゃあ今度はちゃんととした設[定]考え  
てから説うね…」

功「中一[痴]いひ!」せもひやめのー。」

#6 学級委員を決めましょう。(前編)

閲覧ありがとうございます。(前編)

## #6 学級委員を決めましょ。\*

……なんでこうなった?

俺は今、自分の置かれている状況を理解できていなかつた。  
否、脳が理解することを拒んでいた。

「では、学級委員長になつた大藤君に一言挨拶してもらいましょう  
!」

……なんでこうなつた?

朝である。

学生であるからには学校に行かなければならぬ平日の朝。  
入学シーズン、年度初めの四月の初旬。  
まだ肌寒いが、清々しさのある朝。

そして、一階から漂うみそ汁のうまい匂い。

母さんは料理が非常にうまいので、毎回楽しみにしている。/  
そんな朝だが、俺は惰眠を貪っていた。

「……」

クラスのSHRが始まるのは8：30分。

登校にかかる時間20分。

そして現在 7：45 分。

今起きれば着替え、洗顔、朝食を済ませ、S H R の始まる前にはクラスに着くだろう。絶好の起き時間だ。

「…絶好の起き時間ってなんやねん」

自分にシシコミをいれる意味はないが、気にしないでほしい。なんか寝起きて独り言が増えるんだよ。

しかし、春眠暁を覚えずとはよく言ったものである。

ホントに春は気持ち良く寝れるな。

「…起きるか」

まだまだ寝たりなく感じるのを否めないが、そろそろ起きないとまずい。

ちなみに時間がまことにない。

俺は遅刻くらいなら全然できる。もともとめんどくさがりなのだ。じやあ何がましいかつて？

妹だ。

大藤家において妹という立ち位置に存在している大藤美香。なぜか俺を異様に慕っている、妹。

…まあ理由に心当たりがないわけじゃないが。

これだけ聞けばまあかわいいもんかもしけないが、実際は恐ろしい。頭はよくないが運動神経は高いという、馬鹿っぽさが全面でいる行動。

それはまだいい。

家事やら裁縫やら女の子っぽいこともできない駄目っぷり。

それもまだいい。

これらだけなら、しょうがないなあと思つていられる。  
しかし、兄の俺が本氣で直操の心配をしなければならぬ行動を時々起こす。

これはアウトだ。

特に危ないのが朝だ。

俺が起きてないと、おはよつのキスなどといつ新婚夫婦でさえ恥ずかしがるような行為を迫つてくる。

それを未然に防ぐため、朝寝坊はできないのだ。

「着替えるか…」

パジャマを脱ぎ、制服に着替えようとシャツに手を伸ばしたところで急に部屋のドアが開いた。

「おはよー」じりこめーす…

「おはよー。で、なぜ小声?」

「ちつ起きてたか。おはよー。」

「不吉な咳きが聞こえたぞー!?」

寝てたらやつぱり何かされてたのか!?

「つてお兄ちゃん裸じゃん!」

「裸ではないからな?」

ボクサーパンツは履いてるぞ?

しかしキャーとか言つてゐると、やつぱり年頃なんだなあ。

妹の羞恥心が確認できちゃつと安心したな。

「もうお兄ちゃん、恥ずかしくなーのー?」

「すまんすまん。ってなんで『メ撮り』してんだー?」

前言撤回。

言葉だけで羞恥心は微塵もなさねだー。

「兄の成長記録を妹はつけないといけないからねー。」

「そんな義務はないにもなー。」

「まじき父親ですか? そんな」としてないだー。

「で、起こしに来ただけか?」

「うん、お母さんが朝はんだから降りてきて」

「わかった。すぐ着替えて行くから先いつてな

「わかった!」

聞き分けのいいところはかわいいんだけどな。

それでもう少し大人しくなつてくれれば文句もないんだが…。

「やつだお兄ちゃん。最初の地の文がちょっと長すぎじゃない?」

「お前は世界観をぶち壊すやつな！」と叫ぶな。」

地の文とかこつなよー。  
常識を身につけろー。

「おせよつぬわせ」

「おせよつぬわせ。あらあら、ぐつすり寝れたみたいね？」

笑いながら頭を手櫛でとこてくれる。  
寝癖があつたらじー。

「あつがと」

「いいのよ。ほり、時間もあんまりないから朝、せん食べたりせつて」

「いただきまーす」

みや汁を一口かかぬ。

うまい！

と、顔に出でたのかぬさんが嬉しそうな顔をする。  
恥ずかしいな。

「お粗末さまでした」

「お粗末さまでした」

「じゃ行ってくる

「こつてらつしゃー。気をつかるのよ

時間が結構押していたので食べ終わって家を出る。

「美香、早く来ないと置いてへやー。」

「行く行く今行くー。」

「何してたんだ?」

「わが家の『メをなんでもなーよー。』

「何してたんだー!」

結局撮られたのかよー。」

「こつてらつしゃー

#6 学級委員を決めましょ! (後編)

続もまか。

## 「ニシクネーム」（前書き）

閲覧ありがとうございます。

## 「ニックネーム」

恵「私たちってみんな名前か名字で呼びあつてるよね？」

功「言われてみたらそうだな。けどいきなりなんだ？」

恵「いや、ニックネームがある人って周りにいないなーと思つて」

悟「確かにそうだね。僕も名前で呼ばれることが多いし」

功「おいおい、何言つてんだ？お前のあだ名はダサメガネだろ？」

悟「違うよー。そんなの始めて言われたし、もはやあだ名じゃなくただの悪口だよ！」

功「え、気づいてなかつたのか……？」

悟「マジでー？僕ホントにそんな風に呼ばれてるの……？普通に傷つくんだけどー！」

恵「ちなみにダサいのはメガネじゃなくて悟だよ？」

悟「それは聞きたくなかったねーー。フォローになつてないよー。」

功「まあ冗談はこの辺にしといて」

恵「そうだねー」

悟「そんなあつさつやめるなら最初からしないでよー。まあ冗談で

よかつたけど」

功「半分本当だけどな」

悟「どれが本当だつたの…？」

恵「私もあだ名で呼ばれてみたいなー」

悟「大事なことだからスルーしないで…」

功「だいたい冗談だつたからもつ気にすんなよ」

悟「だからなんで不安を残す言い方をするかな…？」

功「はいはい、全部冗談でしたー」

悟「絶対嘘じやん！」

功「で、恵のあだ名か…」

恵「なんかある？」

功「…めぐみん」

恵「…それは恥ずかしいかもー」

功「俺も恥ずかしかつた…」

恵「けどあれかもねー。あだ名つて昔から呼んでて定着しないと恥ずかしいのかも」

功「そうかもな。今更違う呼び方ってできないもんな」

恵「うんうん。そういう意味じゃ悟は一人だけあだ名で呼ばれていいねー」

悟「僕自身は昔から呼ばれていたって知らなかつたんだけど…。しかもダサメガネでも嬉しいと思うの?」

功「よかつたなサドル」

悟「そらこいつなあだ名つけないでよー。」

功「俺らはあだ名なくてよかつたな」

恵「そうだねー」

悟「やつぱりなくつていいと思つてゐるじゃん!」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1856ba/>

---

笑い日和。

2012年1月10日17時52分発行